

あの頃の風景

おくのほそ道 第4回

士民共楽の理念の地 「白河」

大日本コンサルタント株式会社/総務部総務室
遠藤徹也 ENDO Tetsuya (会誌編集専門委員)

『卯の花をかざしに関の晴着かな 曾良』



① 南湖公園には17の景勝地が設けられている。昔も今も優雅な風趣を湛え、多くの人々を魅了し続けている

陸奥の玄関口となる白河の関は、『おくのほそ道』の冒頭に「白河の関越えんと」と記されるほど、旅の主要な目的地の一つでもあった。この関は古より平兼盛、能因法師、源頼政といった多くの文人墨客の歌に詠まれるなど、歌人憧れの地であった。そこで的一句が旅を供にした曾良の句である。この時、何故か芭蕉自身が句を詠むことはなかったが、彼らの歌を織り込みながら実際に白河の関を訪れた感動を記している。

しかし、芭蕉が訪れた1689年当時は関所が廃止されて400~500年が経っており、肝心の白河の関跡は不明であった。その位置が定められるのは、100年以上経った1800年、白河藩主松平定信が古文書の調査や古老への聞き取りを基に白河の関跡を断定し、現

在の白河市旗宿に「古関蹟」の碑を建てるまで待たねばならなかった。

定信は幕府老中として寛政の改革を主導したことで有名であるが、白河藩主時代の1801年に南湖と呼ばれる庭園を築造したことでも知られている。南湖は白河城下の南側、もともと大沼と呼ばれた湿地帯で、定信はその開発に卓越した手腕を発揮した。高賃金で求職者を募り、沼東側に土手を築き、水を塞き止め、沼を浚渫し、数十日で新田灌漑用の溜め池を兼ね備えた園地を創り出したのである。西に那須連山、東に関山を借景とし、湖畔には松、桜、楓などを植林し、山水が調和したその姿は、自然に学び真似るといふ定信の庭園思想が反映されたものであった。



②(上) 1915年の本町通り。同年11月に大正天皇の即位の式が行われたことを奉祝して、町を挙げての旅行列が催された
③(右) 現在の本町通り。今でも商家や蔵などの歴史的景観が多く残り、それらを舞台に白河提灯まつりや白河だるま市などが開催される



⑥(右) 戦後、白棚線跡は日本初のバス専用道として整備され、アスファルトの国鉄線として生まれ変わった。今でも路線の一部はバス専用区間となっている
⑦(下) 1916年に白河駅と棚倉駅を結ぶ鉄道として開通した白棚鉄道の南湖駅。同鉄道は1941年に鉄道省に買収され、戦時下の物資不足によりレールが撤去された。その後、鉄路が復活することはなかった



④(上) 1887年に白河駅が開業し、1921年に現在の地に移転した。馬の運送用に長い貨物ホームが設けられた
⑤(左) 当時の木造駅舎が今もその姿を留めている



⑧(左) 1930年頃の馬市の様子。戦前、全盛期の白河の馬市は、1万頭以上の馬が集積する全国に抜ぎ出た馬匹流通市場であった
⑨(下) 旧奥州街道、現在の国道294号。日本一の馬市を誇ったが、1964年秋の馬市を最後に長年の歴史に幕を閉じた



一般的に大名が造った庭園は大名庭園とされ、大名が独占して楽しむものであり、庶民は立ち入れなかったが、この南湖は、「士民共楽」の理念のもと、年間を通じて士農工商全ての人に開放されたことから日本最初の公園と言われている。

その他にも定信は白河に大きな功績を残した。藩校を拡張して立教館を設置し人材育成に努め、飢饉対策として米穀を貯蔵させる郷蔵を設置し、人口増加策として間引きの習慣を改めさせた。また、馬産の規制を緩和して奨励したとも言われる。その他、伝統行事である白河だるま市のだるまの顔は、定信のお抱え絵師谷文晁の意匠とされる。

白河市の中心市街地は、江戸時代初期の城下町がそのまま都市構造として引き継がれており、現在でも

旧奥州街道沿いには多くの歴史的建造物が集積している。さらに、350年の伝統を引き継ぐ白河提灯まつりや400年の伝統を誇る白河だるま市などが、定信の功績とともにこの地に残り、それらの営みが城下町ならではの風情や情緒を醸し出している。

<参考文献>
1) [白河市史 第二巻通史編2 近世]白河市 平成18年2月
2) [白河市史 第三巻通史編3 近代・現代]白河市 平成19年2月
3) [保存版 白河今昔写真帖 保存版]郷土出版社 平成20年9月
4) [白河市歴史的風致維持向上計画]白河市 平成23年1月

<取材協力>
白河市歴史民俗資料館

<写真提供>
写真①、②、④、⑦、⑧ 白河市歴史民俗資料館
写真③、⑤、⑥、⑨ 筆者